

海洋
冒険小説
シリーズ③

けむりの島

アントニー・トルー
尾坂 力 訳

旅客機がインド洋に墜落した
漂流の果て孤島にたどりつく男女九人
複雑な人間関係が織りなす奇妙な共同生活
典型的な漂流物語の傑作！

パシフィカ



アントニー・トルー

尾坂 カ一訳



パシフィカ

訳者紹介

尾坂 力（おさかつとむ）

青山学院大学英文学部卒業。E・S・ガードナー『罅いの中の女』、エラリー・クイーン『顔』、ロビン・ムーア『第五帝国』（いずれも早川書房）など、訳書多数。

©1978

海洋冒険小説シリーズ⑧

けむりの島

アントニー・トルー著 尾坂 力訳



編集発行

株式 株式会社 パシフィカ

東京都港区南青山2-24-15 青山タワービル
東京03 (479) 5231~4

発 売

株式 株式会社 プレジデント社

東京都港区北青山1-2-3 青山ビル
東京03 (478) 1411 振替（東京）8-35607

初版印刷 1978年10月5日

初版発行 1978年10月16日

装幀・島津義晴

印刷・製本 中央精版印刷

0397-540903-7465

1000

海洋冒険小説シリーズ③

けむりの島

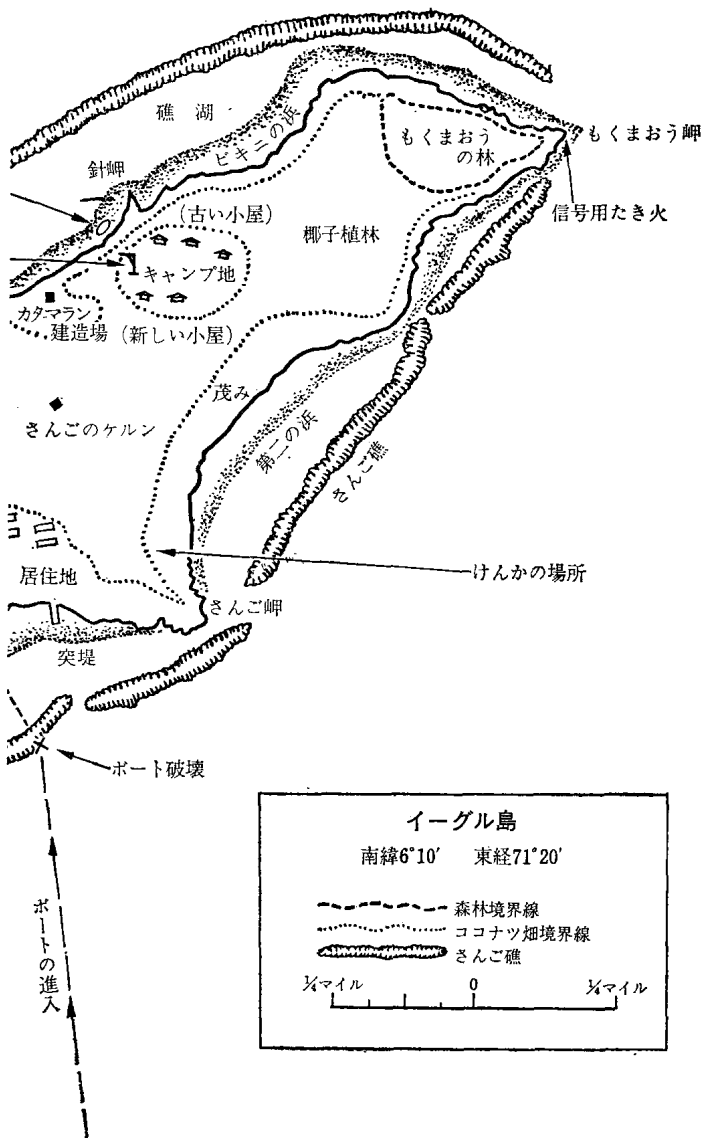
チャコス諸島

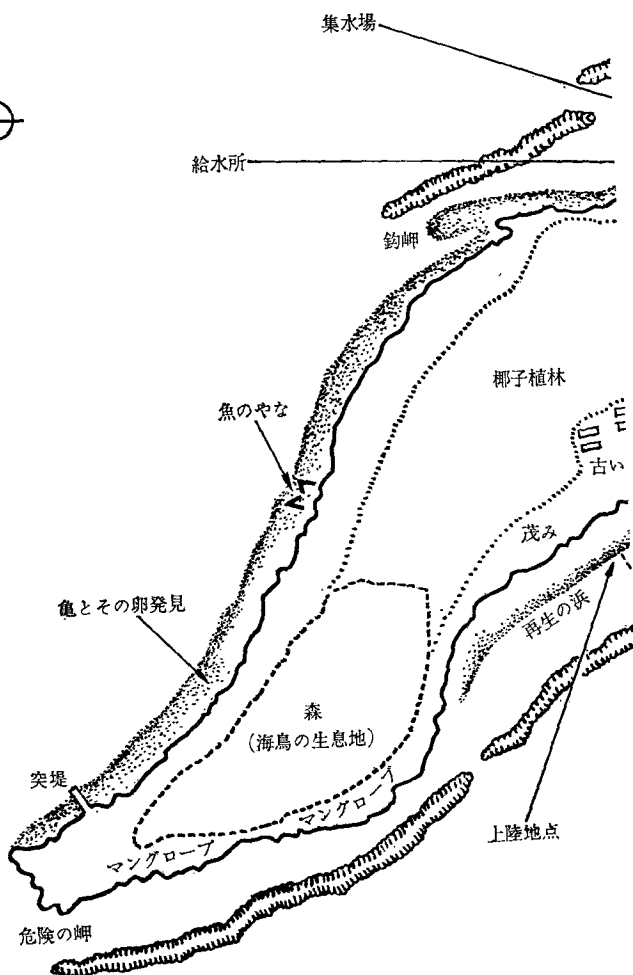
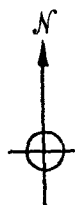
南緯四度四四分から七度四一分、東経七〇度四七分から七二度四七分の間にある多数の島とさんご礁より成る。モーリシャス領。

この諸島の最も著しい特徴は、島と礁脈と^すが、典型的な環状さんご礁の形態をもっていることである。

南インド洋水路誌

英海軍省水路測量局
一九五八年発行 第七版





ノ
ー
ラ
へ

その旅客機の垂直安定板は、月の光の中で、黒い文字のついた銀色のオペリスツのように、水中から高く突き出ていた。その上部がゆっくり前のめりになり、つい今まで水柱と渦巻きがあったところへ、震動しながら突っ込み、風と波に押され、間もなく、そこには、寄せてくる波しかなかった。波の谷は、ねっとりと黒かったが、月の光を受けている波の頂きは白かった。波は、泡立つ音をたてながら、ゴム・ボートに押し寄せ、ボートを荒々しく高く持ち上げ、それから闇の中に去っていった。

彼女は、また水を吐き出す音を聞いた。今度は、前よりも近く、シューシューとせわしない音だった。

「こっちへ泳いでくるんだ」と黒人が言った。「明かりが見えた」

「いや、ボートが彼の方に寄っていつてるんだ。気の毒だが乗せる余地がない。われわれだけで満員だ」それは、鼻にかかったかん高い声だった。

オーストラリア人の一人だわ、と女は思った。

反対側のびしょ濡れになってうずくまっている者が唸った。それから、年かさのイギリス人の声がした。あわただしい命令口調だった。

「もちろんだ！ 乗せてはいかん。ボートが転覆してしまふ。寄せつけるな」

女はびっくりした。「ばかばかしい！」女は強く言った。Rの発音が、英語国民以外の人種らしく巻き舌だった。「このボートは二十人乗りよ。あの人を引き上げるのが当然だわ」

ふたたびシューシューと音がした。ほとんど舷側だ。

「すぐそこにいる」と黒人。彼は泳いでいる者に叫んだ。「おい！ 君！」彼は、水中でもがいている男を見おろした。男の胸には、弱い光を放っている電燈があった。黒人は、ボートがつぎの波の頂きに乗ったとき、月光を受け、大きく目を開いている、男の白い顔を見ることができた。黒い口髭の下の方が開いて、苦しそうな声が出た。「助けてくれ！ 頼むから、つかまえてくれ！」そして、腕をボートの方へ差し出した。ボートは波の頂きから滑り下り、水中の男にぶつかった。

そのアフリカ黒人はボートの縁から身を乗り出すよう

にして両手を差し出した。「おい！つかまれ！」

水中から二本の腕が上がり、二人の男の手が握り合わされた。黒い手が白い手を引きつけると、水中の男の両腕がボートの舷側の上に出た。ボートは、男の重みで、その方に傾いた。

「危い！」覆いの下から、怒ったような声がした。「ボートが沈むじゃないか」

「そうだ」とふたたび鼻にかかった高い声。「そんなやつはほととけ！そんな男のために、こっちが溺れてたまるか」

「溺れやしないわ」女がすぐ言った。「手伝うわ」彼女は暗闇の中で身をよじり、ボートの底の水をはね飛ばしながら、黒人のそばに行った。彼女が身を乗り出して、男の首に片腕を巻いたとき、ボートは、いっそう傾いた。

「さあ！」彼女は叫んだ。「一緒に——それ！」

二人が引き上げると、男の体が持ち上がり、両腕と肩がボートのふちを越えた。男は、ぐったりして喘いだ。ボートが波の頂きに向かって黒い傾斜を登り出した。「今よ！」二人が最後の力をこめて男を引き上げると、男の両脚がボートの中に入った。

女は、訛りのある英語で、闇の中の人々に言った。「ほら、ちっとも危険じゃないでしょ。乗る余地はたっぷりあるわ」

新来者が体を動かした。「ありがたい。ありがたい」初めは南アフリカのオランダ語、二度めは英語で、苦しげに、喘ぐように言った。南アフリカ人の乗客の一人なんだわ、と女は思い、下を見た。だが、あまりに暗くて男の顔は見えなかった。顔は、投げ出されたままの姿の中の、ほの白い部分にしかすぎなかった。その黒い姿の胸のあたりで、救命胴衣の電燈が、目のように光っていた。彼女はスイッチを切った。

ふたたび唸り声がした。

「誰が唸ってるの？」と女。

「わたしの隣の男だ」とオーストラリア人が答えた。彼は、闇の中で男を突つついた。「どうしたんだ？どこが痛いんだ？」

突っつかれて、唸り声はいっそう強くなった。

「ほっときなさい」と女。「怪我をしているのよ」彼女は、その男を水から引き上げるのを手伝ったときのことを思い出した。ミラノ出身の若い男だった。

まわりの闇の中から、柔らかい温か味のある声がし

た。「わたしち死ぬの？」フランス訛りのある女の声だった。感情のこもっていない、平板な質問だった。

「そんなことないわ」と女。「こういうゴム・ボートは、もつとひどい天候にも耐えられるようになっていいるのよ。夜が明けたら、わたしたちの捜索が始まるわ」彼女は、そのフランス訛りの女が誰か知ろうとした。モーリシャスで乗ってきた色の浅黒い女に違いない。美人だ。クリオール人（西インド諸島、インド、アフリカに
おける白人と現地人との混血人種）だろう。

誰かが吐いた。ちよつとの間、酸っぱい、いやな匂いが一同を襲った。神様、わたしたちはどうなるのでしょうか、と女は考えた。彼女は泣き伏しそうになったが、その気持ちに耐えた。彼女のほかに指揮をとる者はいない。自分が挫けたら助かる見込みはない。乗務員がいてくれたら。アイルズか、ステイヴか、バッドか、カーリンでも。

彼らはどうなったろう？ 彼女は覆いから外を見た。月はふたたび雲に隠れており、暗かった。雨と風だけだ。ボートは大波の谷から登り、波の頂きで激しく揺れ、反対側に向かって、気持ちが悪い降下をした。ひどい動揺と水しぶきだけだ。涙がまた出てきた。彼女はそれを抑えた。

遭難信号！ 遭難時の火炎信号弾！ そうだわ。彼女は訓練を思い出した。ゴム・ボートは寄り集まらなければならぬ。それが最も重要だ。ボートをつなぐロープは、各ボートの中にある。火炎信号！ どうしてそれを忘れていたんだろう？ ばかだわ！

「火炎信号弾を上げます」と彼女は事務的な口調で言った。「ほかの救命ボートに、わたしたちがここにいることを知らせるんです」

「それが、どうして役に立つんだ？」とアフリカ黒人。彼女は、闇の中で彼の方を向いた。「ゴム・ボートは集まらなければいけないの。そうすれば、お互いに力になります。救助隊にとっても、ずっと都合がいいんです」

彼女は、自分の救命胴衣の電燈を使って、非常箱の中から、防水懐中電燈と火炎信号の箱を見つけた。五分の間隔をおいて、二発の照明弾を打ち上げた。だが、応答の信号はなかった。風と波の叫び、波の碎ける音、人のつぶやきと唸り声、ひどくなる吐く声、そして刺激性の悪臭。

闇が薄らいだので、夜明け間近だったに違いない。彼

女は、ボートの中の人々の姿や、唸っている者の位置などがわかるようになった。

最初彼女は、あまりに幸運すぎて現実とは思えなかった。信じる気持ちになれなかったが、やがて事実だとわかった。『風がおさまってきたわ。波も今は、あまり高くないわ』

『ひどく水がたまっている』と心配そうな声。『穴があいてるに違いない』

『まさか』と女。『ふちから入ったのよ。かい出しましょう』

彼女はあか汲みを見つけ、一つをその男に渡し、自分は別の水をかき出しにかかった。男が言ったとおりの水の量は多かった。どこもかも濡れていた。薄暗がりの中でも、それはわかった。ボートの中の陰になっていないあらゆる部分と人々が灰色に光っていた。闇の黒さの代わりに、濡れた灰色が満ちていた。

『少しも減らない』不安そうな声がした。

あの人、怖がってるんだわ、と彼女は思った。わたしも怖い。彼は、なぜ口に出して、人を不安にさせるんだらう？

『減ってきてるわ』と彼女は言っつて男を見た。今は、丸

くふくらんだ顔と肉づきのいい顎が見分けられた。彼もほかの者と同じに、灰色に濡れていた。禿げ頭のとつべんも灰色だ。ほんの少しの髪が眉毛のところまで垂れていた。ひどく小さい寄り目が恐怖で光り、あんぐりあいた口の、ふつくりした下唇が官能的だった。彼女は、その男のことを思い出した。モリスヤスに着陸する直前、ソーダ水が冷たくないと言句をつけた男だ。それも、とてつもなく大声だったので、わがままな男だと皆に宣伝したようなものだった。

彼女は、頭の中で、乗客名簿を思い出そうとした。すると、ハッと思い当たった……キャニング！ ハーバート・ウィリアム・キャニングだ。乗務員は、ソーダ水事件のあと、彼のことを調べた。彼はロンドンからの復路に、ヤン・スマッツで旅客機に乗ったのだ。いやだわ、と彼女は思った。なぜ、こんな男がここにいるんだらう？ 青年だったらしいのに。

夜は急速に明けかかり、灰色の姿の何人かが身動きしはじめた。アフリカ人は頭を振って、眠気を払い、覆いの口へ出て海を見た。黒から灰色に変わっていく濡れた人々の姿だけが見える覆いの下より、外の方がずっと気持ちよかった。

ゴム・ボートの底にうずくまっている者の一人が水中で身動きしはじめた。まず両脚が曲がり、足の指がピクピクし、そして両腕と手の指が動いた。それから、救命胴衣の下が肩が揺れた。無事だった、とその男は思った。だが、首が凝っていた。機体が爆発する寸前、海中に投げ出されたとき、何かにぶつかったのだ。

そのあと、彼は、イーソーに見つかからないように走っている夢を見た。早く走らなければならなかった。彼はわずか七歳だし、イーソーは少なくとも九歳になるだろう。イーソー自身、部落のほかの土民同様、自分の年を知らなかった。イーソーはすぐ目から手を外すから、早く隠れ場所を見つけなければならぬ。彼が部落の扉を回ったとき、イーソーが叫ぶのが聞こえた。「エク・コム・バシー——」「若旦那、すぐ行きますよ」

前には石囲いがあり、その中には、井戸の穴のまわりに少し土を盛り上げた所があった。彼は扉を乗り越え、その内側にうずくまった。息をはずませながら、少しでも小さくなろうと体を丸くした。彼は石囲いを見ていた。内側は見ようとしなかった。内側には恐ろしい穴があったからだ。

「あの穴には、大きくて真つ黒なマンバ(南アフリカの毒蛇)がいる

んだよ」と母親に注意されていた。「クラシーおじさんを殺したやつより大きいのがね。坊や、あの穴のそばへ行くんじゃないよ」

彼は、その大きなマンバのことを考えはじめた。その思いにふけっているうちに、隠れんぼのことを忘れてしまった。急に耳もとで叫び声がした。びっくりして倒れたとき、自分を見つけた興奮のあまり、イーソーが叫んだのだとわかった。そのときは、もう遅かった。彼はもがいていた。

水中は暗く恐ろしかった。水が彼の肺を痛め、体をよじったり、爪で引っ掻いているとき、赤と白のギザギザした光が頭を突き刺した。水の中の苦悶は無限に続くかと思われた。しかし、彼が死にそうになったとき、黒い二つの手がのびてきて、彼をつかんだ。その手が黒いのがわかったのは、自分の白い手をつかんだとき、月か何かの光のために、黒白の区別がついたからだ。だが、そこで夢は終わり、すべての思い出は断ち切られ、残っているのは母親の声だけだった。

ボートの中で、びしょ濡れになり、怪我をした体でうずくまっていたとき、彼は、それが母親の声ではなく、隣で水をかい出している女の声であることを知って、ひ

どく驚いた。

やっとこき上体を起こしたが、その動きで体が痛かった。首と胸が焼けるような感じがした。口が乾いて、ふくれていた。彼は隣の女のやつれた顔を見た。高いほお骨、弓なりの眉毛、窪んだ茶色の目を。ずっと前、どこかで彼女を見たような気がした。思い出した。旅客機のアステアの一人だった。だが、もはや彼女は、若くも魅力的でもなかった。目の隅から顎の下にかけて、ほおに長い引つ掻き傷があった。傷に沿って、赤黒く血が凝固していた。茶色の髪が、ねずみの尻尾のように顔にかかり、オレンジ色の救命胴衣の下ブラウスは、片袖が干切れて、肩があらわになっていた。

彼は彼女の顔を見た。「わたしは、どうしてここにいるんです？」

彼女は水を汲み出すのをやめ、目にかかる髪を払いのけようとした。「わたしたち、海から、あなたを引き上げたのよ——昨夜」

彼は信じられないように彼女を見た。「わたしを？ わたしが海にいたんですと？」

「覚えていないの？」

彼はうなずいた。「海に投げ出されたことと、爆発は

覚えているけど。そのあとは、夢を見てしまった」

彼は手で首すじにさわった。「わたしの首にぶつかった」

「何が？」

「何か堅い物が。ピシッと。今でも首が動かない」

彼が話している間に、黒い片手がのびてきて、その女性からあか汲みを取った。「わたしにさせなさい」と男の声。

すぐ近くから不意にのびてきた黒い手は、すごいショックだった。顔をひっぱたかれたようだった。彼が見まわす前に、それが誰かわかった。今は明るくなっており、彼が振り向いたとき、二人の目が合い、じっと見合った。凍りつくような瞬間だった。

旅客機で二人は隣合った席だった。黒人は窓寄りだった。おれは、あいつのように官費じゃなく、自分の金を五五〇ポンド近く払ったんだぞ——それなのに航空会社は、ヨハネスバーグからメルボルンまで、おれを黒人と隣合わせで行かせるつもりなのか？ 彼が乗務員に文句をつけたとき、乗務員は、何ならイタリア青年に席を代わってもらいなさい、と言ったが、その黒人に、席を代えることを頼むことはできなかった。なぜなら、その黒

人はソールズベリ(アロデシの首都)の国会議員で、しかも怒ぎわの席を予約していたからだ。乗務員は、機転をきかせて、オーストラリア政府の政策もあることだし、あなたの方が席を代えなさいと言った。彼が荷物をまとめている間中、その黒人は、まるで茶番でも見ているかのよう

に、薄ら笑いを浮かべて座っていた。
いつ沈むともしないボートの中で、全身に痛みを感じ、救助される望みもほとんどない今、あの黒ん坊とあの浅黒い女と、最後の時を過ごさねばならないとは。故郷の連中に知られずに済むことが、彼にはうれしかった。

黒ん坊のことは我慢できないが、今は、生きのびるために、神から与えられたあらゆる力と手腕と知恵を使わなければならぬ時だ。だが、目で見、感じられる事情から考えて、生きのびることは容易ではなさそうだった。

彼はふたたび女を見、自分のオレンジ色の救命胴衣を指さした。「これを脱いでもいいかね？」

「今は駄目。あとで」

水をかい出して疲れているので、返事をするのがやっとだった。ボートの中の水は、へどや小便やその他の汚物で汚れきっており、彼女はその悪臭に耐えられなかつた。

た。船酔い、ショック、緊張、睡眠不足のため、彼女は卒倒寸前だった。

彼女は、かすんだ目で見まわした。ボートと水平線が回りはじめた。初めはゆっくりと、それが次第に速くなり、彼女は倒れた。

夜が明けた。最初に気がついたのは波の状態だった。まだ相当高かったが、夜の間よりは静かになっていた。風は、それほど強くなく、雲の間から青空が見え、太陽が暖かい指でボートをなでた。

彼女は、のどがひどく乾き、水が欲しかったが、その気持ちを追いつめた。覆いの下は明るかった。彼女は数えてみた……九人……自分を入れて一〇人……濡れて固まっている一〇人。五人はまだ眠っている。ひどく衰弱している大学の女子職員……最後に救い上げた南アフリカ人……イタリア青年……丸い頭のやつれた男……まぶたの下がったやせた男。夜中唸っていたのは、その男とイタリア青年だった。今、男は、ぐったりと横になっている。口を開け、速い息づかいだ。髪は額から後退しており、頭には血だらけのギザギザの傷があった。

若いイタリア人はボートの真ん中に横になっていた。

膝を曲げ、彼女の方に顔を向けて。夜の間は一言も口を
きかず、時々低くうめくだけだった。今はボートの水は
汲み出されていたので、彼の体は、前のように水浸しに
ならず済んでいた。彼女は、ひどく気の毒に思った。
彼は若く、今度の飛行に興味を示していた。静かで、丁
寧で、親切だった。クルー・カットの髪の下顔は白墨
のようで、目は……！ 大きく開いて、彼女を見ている
……まばたきしないのは変だ、と彼女は思った。そし
て、彼が死んでいることがわかった。

ボートの向こう端で、キャニングとオーストラリア人
が低い声で話し合っていた。彼女は二人の話を中断した。
「見て！」と彼女は指さした。「あの、死んでるわ」
二人の男は驚いた。キャニングの目に恐怖が浮かんで
いるのを、彼女は見た。「死んでる？」彼はぼんやりと
言った。「大変だ！」

「海へ投げ込もう」とオーストラリア人。
彼女は彼を見て、シロイタチのようだと思った。黒
く濃い髪は、機内ではポマードがたっぷり塗ってあつた
が、今は乱れている。細い顔に黒く細長い寄り目、鼻穴
の長い大きな鼻、小さく薄い口、とがった顎。
明るくなっていたので、彼女は、彼が誰かわかった

……アーサー・バセットだ。彼もロンドンからシドニー
に行く乗客だ。彼女と同僚のカーリンは、機内で、す
ぐ、彼には女の尻にさわる癖があり、デブの老人キャニ
ングには乳房をのぞく癖があることがわかった。ホステ
スが何かを渡そうと上体を折ると、ブラウスの襟の間か
ら、サツと中へ視線を走らせる手合いだ。彼女たちは、
パースに近づくころ、二人の男は、きつと彼女たちの電
話番号をきくだろうと思ったものだ。

「海へ捨てようぜ」とバセット。「死体はここへ置いと
けない。これから暑くなる」

女は首を振った。「まだいけません。皆さんが目を見
ますまで待ちなさい」彼女は時間をかせごうとしてい
た。どうせ死体を始末しなくてはならないだろうが、シ
ロイタチにさせるのはいやだった。

「いいか！……ここは旅客機の中じゃないんだよ」と
キャニングが文句をつけた。「さっさと、わたしたちの
言うとおりにしなさい」ふくれたはおの灰色の目は
血走り、禿げ頭のまわりの薄い毛は白っぽい茶色だが、
顔から首にかけてのびた髭は白かった。

彼は、女が黙っているので勢いづいた。「置いておく
必要はない」恐ろしそうにイタリア青年を見おろして、